

限界から学んだこと

山形県山形市立第三中学校

三年 大石 茉 奈

小学六年生の二月、卒業式を間近に控えた頃、私はとある決断をしました。それは「学校へ行かない」ということでした。正確に言うと、「行きたくないから行かない」のではなく、「行けないから行かない」の方が正しいです。

私がそう決断した理由は様々ですが、ひとつだけ言うのであれば、「自分に限界が来てしまった」ということです。学校を遅刻しがちになり、毎回楽しみにしていたピアノや英会話といった習い事も休む回数が増え、次第に続けることが困難になり、いつの間にか三つや四つとやっていた習い事のほとんどをやめてしまっていました。私はそんな不安定な状態のまま卒業式を迎え、春休みを過ごしました。「中学校に入学すれば、この不安定な状態は自然と解消される」

私はそう思っていました。そんな私の期待を裏切るかのように状態は悪化していきました。親との喧嘩も絶えず、起きたくても起きられない、眠りたくても眠れない。そんな生活が続きました。

不登校になって一年がたった頃、小学三年生の頃から仲良くしてくれている学校外の親友二人に久しぶりに会う機会がありました。私はずっと一緒にい

てくれている親友に隠し事をしているのが嫌で、勇気を振り絞って、学校へ行っていないんだ、と打ち明けました。どんな反応をされるのが怖くて私はうつむいたままでした。あの時二人が言ってくれた言葉を私は未だに覚えています。

「気付いてあげられなくてごめんね。」
 「言い、私をぎゅっと抱きしめてくれたのです。私は驚いたのと同時に、泣きそうになりました。まさか、こんなにも温かく受け入れてもらえるとは思っていませんでした。」

その言葉を聞いてから、私は少しずつ、支援学習室へと登校し始めました。もちろん、中学二年生へと進級し、少しずつ学校に慣れていきかけたというところもありますが、二人に笑顔で、「学校へ行けるようになったんだよ、高校に合格したよ」と言いたかったからです。この二人がいなかったら、私は今ほど回復できていなかったかもしれません。

二人は、私に学校へ登校する「きっかけ」をくれました。中学二年生の四月から私の支援学習室での生活が始まりました。最初は入ろうとするだけで心臓がはち切れそうになり体が動かなくなりましたが、先生からのサポートが私の行動する糧になり、波はあれども支援学習室へ居られる時間がだんだんと増えていきました。実際、中学三年生になった今でも波があり、この作文を書いた前日の大切な実力テストも教室に入ることができず、時間をずらして別教室で受けました。そんな状態の私を二年間支えてきてくださった学校の先生方には感謝してもしきれません。今では、学校の先生方に周りの人たちと同じように学校生活を送れるようになった姿を見せることが私の目標の一つでもあります。

中学三年生になり、二人と仲良くなって六年が経ちますが、今でもその二人とは親友です。一人は同

い年で、もう一人は一つ年下の子なのですが、受験が終わったらまた三人で遊びに行こうと約束して、今は三人それぞれ自分の目標に向かって頑張っています。

私が不登校になって気付いたことは、「友達や周りの方の支えてくれる力の存在は大きい」ということと、「どんな状況からでも脱却はできる」ということです。これは、私にとっても大きな学びでした。不登校はならないに越したことはありませんが、私は不登校になったことは後悔していません、むしろ、不登校になって学んだことが多かった気がします。約二年間学校に登校していなかったことにより、周りの人より体力はないし、友達も少なく、何より学校生活の経験がありません。けれど、私はこの二つに気付いたことが何よりも幸せで、財産です。また、不登校にならないれば出会えなかったであろう、スクールカウンセラーの先生や、児童精神科の先生との出会いは非常に幸運だったと思っています。

最後に、私は不登校になってまるで人生のどん底にいるような気分でした。しかし、その中で学んだこともたくさんありました。抜け出せないと思っていた状況からも脱却することができ、今は回復の方へと向かっています。これは、周りのサポートがあったおかげですが、そのサポートを受け、最終的な一歩を踏み出したのは、いつも自分でした。やるもやらないも自分次第、それが吉と出るか凶と出るかは自分の努力次第だと、この二年間で感じました。私は今日もたくさんの方の支えを受けて精いっぱい前に進んでいきます。